

罪 深 き 愛

——王妃イゾルデと藤壺の宮——

Unsittliche Liebe

——Bei Königin Isolde und Kaiserin Fujitsubo——

斎 藤 美美子

12世紀のトゥルバドゥール（吟遊詩人）が、次のような歌を残している。¹⁾

心が歡びで一杯なので
わたしにはすべてのものが変わって見える
白い花 赤い花 黄色の花が
寒さを思わせ
風が吹き 雨が降ると
ますます嬉しい
そうして わたしの値打はあがり
わたしの歌は美しくなる
心には愛が満ち
歡びが満ち やさしさが満ちているから
氷が花に見え
雪が緑の草に見える

上衣も着ずに 肌着だけで
わたしは外出できる
この熱い思いが冷い北風から
わたしを護ってくれるから
けれども 節度を忘れて

作法に従わない人間は気遣いだ
それゆえ わたしは気をつけている
恋のなかでも もっとも美しい恋を
求めはじめた そのときから
わたしが待ち望んでいる恋の誉れ
その宝の代りにくれようたって
ピサの町もわたしはいらない

あのひとの愛からわたしは遠ざけられる
けれども わたしは自信がある
少なくとも彼女の美しい姿は
目のなかに入れたのだから。
別れても わたしは大きな
喜びを感じているから
あのひとにふたたび会う日
悲しみを抱くことはないだろう
わたしの心は愛に満ち
わたしの思いはかなたへ向う
けれども体は心とは別のところにいる
あのひとから遠く ここフランスに

わたしは十分希望をもっている
けれども あまり助けにならない
あのひとがわたしを波の上の
船のようにゆさぶるから
このひどい船酔いを
どこに避けたらいいものやら
夜じゅう わたしは寝返りを打ち
寝台の外へ投げ出される
この愛の苦しみは
黄金の髪のエズーのために
数々の苦しみを苦しんだ
恋するトリスタンも及ばない

斎藤 美美子

ああ 神よ なぜわたしは燕ではないのか
燕なら 空をよぎって
夜の闇の底をとび
あのひとの許へ行けるのに
陽気なやさしいひとよ
あなたを恋する男は死にそうだ！
この苦しみがつづくなら
わたしの心臓は破れそうだ
愛するひとよ あなたへの愛ゆえに
わたしは合掌してあなたを崇める！
みずみずしい色をした美しい体よ
あなたはかくもわたしを苦しめる！

この世にこれほどわたしの
気にかかることは何もない
あのひとについて噂を聞くととき
わたしの心はあのひとのほうを向き
わたしの顔は光り輝く
わたしが何を言っても
わたしは笑いたがっている
ように見えるだろう
心からあのひとを愛しているので
わたしはたびたび泣く
涙は何にもまして
わたしには味わい深いから

使者よ 走って行け
そしてあの美しいひとに言ってくれ
わたしが耐えている苦痛と苦悩と
死ぬほどの苦しみを

ベルナール・ド・ヴァンタドゥール

この詩人のように、「恋の中でも、もっとも美しい恋を求め」ること、即ち、雅びの愛

といわれ、高きミンネといわれる恋愛の追及こそが、この世紀のヨーロッパ宮廷文化であった。「11世紀と12世紀の変わり目に恋愛の新しい概念、男女間の新しい関係が生まれ、それが野蛮な社会をそれまでにない高度な洗練された文明社会に変え、そこには女性がその社会の美の女神、褒賞、主役として登場²⁾」したといわれる。その女性の一人こそ、この詩人の憧れた「あのひと」、イギリス国王ヘンリー2世の妃となったポアトウ(Poitou)宮廷のアリエノール(Éléonore 1122-1204)³⁾であった。アリエノールの宮廷はトゥルバドゥールの最大の中心地であり、その宮廷人は、冒頭の詩にも歌われているように、トリスタンとイズー⁴⁾の恋物語をすでに熟知していた。爾来、20世紀に至るまで、トリスタンとイズーは恋愛のシンボルとして、欧米世界で生きつづけている。

ほぼ同じころ、11世紀初頭、平安王朝世界においても、「源氏物語」が生まれ、爾来一千年の間、わが国の恋愛物語の至宝として生きつづけている。

しかも、イズーとトリスタンの愛が罪深き愛であったように、「源氏物語」最大の愛、藤壺の宮と光源氏の愛もまた罪深き愛であった。ドイツ文学の徒である筆者が、藤壺の愛を論じる無謀を敢えて行っても、洋の東西で語りつがれ、読みつがれているこの罪深き二つの愛の比較は、興味深いテーマである。

I

8世紀末、北スコットランドにいたケルト人の一派、ピクト人の王、タロルク(Talorc)の息子、ドルスト(Drust, または Drostan)という実在の人物にトリスタンの名は由来する。ブリテン島に残ったケルト人であるウェールズ人は、アーサー王の伝承と共に、このドルストの伝承を伝えた。トリスタン伝説の中心テーマ、トリスタンとイゾルデとマルケ王の三角関係は、「ウェールズ文学に見出される」⁵⁾という。

しかしウェールズ人が伝えていたこのトリスタンの伝承が、12世紀のアリエノールの宮廷まで、どのようにして伝えられていったかは、不明である。ただ、1150年過ぎに、このアリエノールの宮廷のために、アングロ・ノルマン語でトマ(Thomas)がトリスタン物語を書いたことは、断片しか現存していないが、明らかである。

トマのほかに、1170年頃、トマとは異なるフランス語テキストから、ドイツ語に書き直したアイルハルト・フォン・オーベルク(Eilhart von Oberg)の断片も現存しているし、1190年頃、ノルマン方言で書かれたベルール(Béroul)の断片も残っている。

この三つが、文献として残る最も古いトリスタン物語である。この中のトマを手本として1210年頃書かれたのが、ゴットフリート(Gottfried von Straßburg)の「トリスタン」である。先の三つの断片に比べ、文学的に遙かにすぐれ、中世文学の最高峰として評価されているが、残念なことに、ゴットフリートはほぼ最終場面まで筆をすすめながら、未完

のまゝで筆を擱いている。しかし未完とはいえ、12世紀から13世紀の宮廷人が知っていたイゾルデとトリスタンの罪深き愛を考えるには、この作品を中心に論をすすめるべきであろう。

イゾルデは、アイルランドの国王グルムーンと、同じ名をもつ母、アイルランド王妃イゾルデとの娘である。この王妃イゾルデの兄モーロルト⁶⁾は、トリスタンとの一騎打ちで殺されていた。トリスタンは王妃イゾルデにとっては兄の仇、王女イゾルデにとっては伯父の仇にあたる。

モーロルトが一騎打ちの際トリスタンに与えた毒の塗った剣による傷は、アイルランド王妃イゾルデのみが直しえるものであった。トリスタンは、身分を楽人タントリスと偽って、王妃イゾルデの治療をうける以外に生きる術はなかった。こうして、王女イゾルデは仇とは知らずにトリスタンと最初の出会いをした。

この王女イゾルデがトリスタンの心をどのように把えてしまったかを示す言葉をゴットフリードは次のように表す。

「イゾルデは、世間で言われるどんな美しさも、この人に比べれば無に等しいような乙女です。この光り輝くイゾルデは、立ち居振る舞いといい、姿といい、こんなに好ましいすぐれた子供は、男といわず女といわず、これまでに生まれたことがなく、これから先も決して二度と生まれることがないような立派な子供です。……ひとはイゾルデの顔を見ただけで、丁度灼熱によって金が精錬されるように、その胸と心が清められ、生命と体が好ましいものに思われてくるのです。」⁷⁾

上記引用の言葉は、トリスタンが、巧みな口実をもうけてアイルランドから伯父マルケ王のいるコーンウォールへ逃げ帰ってきた時に述べたものである。このトリスタンのイゾルデ賛美が、皮肉なことに、マルケ王の花嫁として王女イゾルデを迎えるための使者の役目を負わせて、トリスタンをアイルランドへ再び赴かせることになった。

トリスタンの王女確得策は、アイルランドの国を苦しめている巨大な竜を退治し、その報奨としてイゾルデをマルケ王の花嫁にもらい受けようというものであった。竜の退治には成功したトリスタンではあったが、その際、竜の毒気で生命の危機に曝される。彼を再び救ったのが、王妃イゾルデと王女イゾルデであった。両人は、助けたのは楽人タントリスであると信じ込んでいた。

「女人たちは二人とも退出して再び楽人の看病に精を出した。二人は始終優しい心遣いをして、彼のためになる事柄ばかりに専心した。そのかいあって、彼は今はもう大分元気を回復して、皮膚の色はつややかに、顔色もよかった。今やイゾルデ姫はしばしば彼に目を注ぎ、その姿と立ち居振る舞いに並々ならぬ注意を払った。しばしばひそかに彼の手や顔を眺め、その腕と脚をつくづく見たが、彼がひたかくしに隠していたものが、それらにあからさまに表れていた。彼女は彼を頭の天辺から足の先までしげしげと見つめたが、お

よそ少女が男性を見る場合に関心を持つすべての点で、彼が気に入り、心ひそかにそれらを称賛した」⁸⁾。

ゴットフリートのこの叙述は、王女の乙女心に、楽人タントリスに対する恋の焰が燃え始めていることを示している。

だが、「これも運命の仕業なのだろうか」⁹⁾、王女イゾルデは、楽人のもっていた剣に、刃こぼれのあるのを見つけた。それは伯父モーロルトの頭の中に残っていた刃こぼれとぴったり合ってしまった。楽人タントリスが伯父モーロルトの仇であるトリスタンであると知った王女は、その剣で、湯殿で無防備のトリスタンを襲おうとする。その時王妃イゾルデが来合わせる。王妃は事情を知って、兄の仇を打つべきか、それとも竜を殺したと偽って娘に結婚を無理強いしている内膳頭とトリスタンを一騎打ちさせるべきか、心乱れる。

一方、王女イゾルデの心も千々に乱れる、「彼女の心の中で二つの対立するものが、すなわち、手を取り合ってもお互いにしっくりしない、怒りと女らしさという敵対者が激しく相争った。イゾルデの心の中の怒りが仇敵を討とうとすると、優しい女らしさがすぐやってくる、『いいえ、そんなことおよしなさい』とやさしく言った」¹⁰⁾。

結局イゾルデの「優しい女らしいさ」、即ち愛がトリスタンに仇討ちすることをとめ、彼は助けられた。

トリスタンが本当の竜の退治者だということが証明されて、王女はマルケ王の花嫁としてコーンウォールへ船出しなければならなくなった。その船旅で、王妃イゾルデがマルケ王とイゾルデの婚礼の床入りのために用意した愛の媚薬を、誤ってトリスタンとイゾルデが飲んでしまう。

この媚薬とは、「これをどんな人とでも一緒に飲めば、その人を心ならずも何物にもまして愛せずにはおれず、相手もまたその人のみを愛するようになって、この二人には一つの死と一つの生、一つの悲しみと一つの喜びが、共有のものとして与えられるのであった」¹¹⁾とゴットフリートは説明している。

「トリスタンは恋の魔力を感じたとき、すぐ信義と名誉のことを考えて、恋に背を向けようと思った」¹²⁾。また「イゾルデとても同じであった」¹³⁾。

しかし二人とも「心ならずも」、恋の魔力の前には如何ともできなかった。「夜、美しいひとが横になり、いと恋しい人を慕い悲しみ、思い悩んでいると、そっと足音を忍ばせて寝室へ彼女の恋人のトリスタンと医師の愛の女神がはいって来た。医師である愛の女神は彼女の患者トリスタンの手を引いて来たのであるが、そこでやはり彼女の患者であるイゾルデを見いだした。彼女は早速二人の患者の手を取って彼を彼女に、彼女を彼に、それぞれの薬として与えた。この両人の体の結合とこの両人の心のつながり以外に、誰がこの二人を共通の悩みから解放し、分かたることができたろう。呪縛者ミンネは二人の心と心を、彼女の有する甘美さという綱で大変巧みに、また大変不思議な力で一つに結び付けた

ので、二人は生涯離れることがなかったのである」¹⁴⁾

この媚薬はケルトの伝承以来、語りつづけられてきたモチーフである。ゴットフリート研究者たちは、この媚薬を飲む以前からトリスタンとイゾルデの間には愛が始まっていたとする見解と、否、この媚薬を飲むことによって二人の間に愛が生まれたとする見解とに二分されている。¹⁵⁾ この問題については、稿を改めて論じたいが、筆者は、イゾルデとトリスタンは初めての出会い以来、互いに愛を感じていたという見解に立って、この稿をすすめていることは理解していただこう。

トリスタンは、生れながらにして両親を失っており、¹⁶⁾ 伯父マルケ王は父親代りの存在であった。トリスタンのためには結婚もしないと一度は宣言したほど、トリスタンを寵愛している。この伯父の花嫁となるべきイゾルデから、いまやトリスタンは離れられなくなってしまった。イゾルデにとっても、トリスタンは何よりも伯父モーロルトの仇であり、しかも夫となるべきマルケ王の甥である。そのトリスタンから、今やイゾルデも離れられなくなってしまった。この二人の罪深き愛は、媚薬というシンボル化をせずには、ケルトの古えより表現不可能であったのではなかろうか、それは伯父の仇、伯父の花嫁ということがもつ古えよりの人倫の掟をのりこえてしまう宿命的な愛であったのだから。

この愛という「大変不思議な力で一つに結び付け」られた二人は「一つの死」に至るまで、あらゆる障害にたち向かっていく。

「イゾルデが、まだうら若く経験に乏しいのに知恵と術策を、この場合としては最良の術策を見つけたのである」¹⁷⁾ それは、マルケ王との初夜に、イゾルデの身代わりを侍女ブランゲーネにつとめさせるという策であった。「このようにして恋というものは、瞞着や不実をするには何が必要なのかさえも知らぬ律儀な心に、不実に専心することを教えるのである」¹⁸⁾ と、ゴットフリートが指摘したように、トリスタンとイゾルデは、二人の間柄を疑うマルケ王やその宮廷人がはりめぐらす奸計に抗して、人知の限りをつくす。その際、初夜の一件に見られたように、しばしばイゾルデが主導権をとって術策を講じた。

その最たる例は、灼熱した鉄の裁きの場面であろう。灼熱の鉄で裁きを受けることによって、身の潔白を証明するようマルケ王から求められたイゾルデは、トリスタンを巡礼姿に変装させて、裁きの場にのぞむ。その裁きの場で、巡礼がイゾルデを抱えて運びながら転倒した。それは全てイゾルデの指示で行われた。そして彼女はマルケ王に誓う、「わたしの体を知った者、またいついかなる時にもわたしの腕の中やわきに寝たことのある者は、生きとし生ける男の中に、あの巡礼は別としまして、あなたのほかには一人もございません。あの可哀そうな巡礼だけは、わたしの腕に抱かれているのを、あなたご自身ご覧になったのですし、わたしは誓うことも否定することもできません」¹⁹⁾ と。

こうして、灼熱の鉄を運んでも、イゾルデは火傷することはなかった。ケルトの伝承によれば、この裁きはマルケ王の求めに応じたのではなくて、イゾルデ自らが神の裁きに従

うことを申出たといわれる。²⁰⁾ここにケルト女性としてのイゾルデの原型が浮かび上がってくるように思われる。「古代母権制の名残りをとどめる社会的影響力、勇気や独立性といった性格」²¹⁾がケルト女性の特色として指摘されているように、主導権をとって術策を講じるイゾルデには、ケルト女性の強さが反映していると考えてよいのではなかろうか。

この灼熱した鉄の裁きの後も、マルケ王は再び二人に対する不信に悩み、到頭、二人を森へ追放してしまう。ゴットフリートによれば、森の中の「愛の洞窟」²²⁾で、「二人は互いに相手を見ることによって身を養ったのであって、目が結ぶ実が二人の食物であった。彼らはそこで気持ちと愛情のみを食べた。愛し合う同居者には食事の心配はなかった」²³⁾とされている。この「愛の洞窟」は、ランケの言を借りれば、「トマの描写の特徴に合せて、周知のごとく、ゴットフリートの手による、全く特殊な愛で彩られている楽園生活」²⁴⁾であるということになるが、トリスタン伝説によれば、森の追放生活は困難をきわめたと語られている。²⁵⁾

この「愛の洞窟」で、二人はマルケ王に見つけられることを期して、抜き身の剣を置いて眠っていた。その姿を見たマルケ王は、イゾルデに対する愛情たちがたく、宮廷への帰還を許すことになる。

しかし、トリスタンがマルケ王の宮廷に長居できるはずはなかった。彼は宮廷を去る決心をする。その別れ際にイゾルデは次のように言う。「あなたが遠く離れておられようと、そば近くおられようと、この胸の中には、わたしの体、わたしの命であるトリスタンさま以外には、どんな命もどんな生き物も住ませはしません。あなた、わたしは長い間、命も体もあなたさまにささげて参りました。ほかの女の人がわたしをあなたから離れさせたりするようなことがございませんよう、長い間、本当に長い間、あんなにも清らかに二人で守って来ました愛と誠を、わたし達二人が今後も変わりなく守り続け、日に新たにしますよう、お気をつけになって下さいまし。さあ、この指輪をお持ちになって、誠と愛の証人になさって下さい。もしもわたしのほかに誰かを愛そうなどというお気持ちになられることがございましたら、どうかこれをご覧になって、わたしの今の胸の中を思い出して下さい。……トリスタンとイゾルデ、あなたとわたし、この二人はいつまでも切っても切れぬただ一つのものなのです。この口づけを、死に至るまで心変わりすることなく、わたしはあなたのもの、あなたはわたしのものであり、二人はただ一人のトリスタンとただ一人のイゾルデであることの誓いの印に致しましょう」²⁶⁾

「誠と愛の証人」となる指輪をイゾルデから受け取って、トリスタンは他国遍歴の旅に出発し、ブルターニュとイングランドの間にあったアルンデールという大公国で、「白い手のイゾルデ」²⁷⁾と呼ばれている大公の娘とめぐり会うことになった。そしてこの「白い手のイゾルデ」と、離れざるを得なかった王妃イゾルデとの間で、トリスタンの心は揺れ動きはじめる。ここでゴットフリートは残念なことに筆を擱いてしまった。

しかしながら、ゴットフリートが手本にしたトマの断片がこの後の経過を伝えている。それによると、トリスタンは白い手のイゾルデと結婚式をあげる。しかし王妃イゾルデの「誠と愛」の印である指輪をみて、トリスタンは白い手のイゾルデと契りを結ぶことができなかった。そうこうするうちに、トリスタンは戦場で致命傷を負う。それを救えるのは王妃イゾルデだけであることを知っているトリスタンは、白い手のイゾルデの兄に当たるカーエディーンに、指輪をもって、王妃イゾルデを迎えに行ってもらいたい、もし王妃イゾルデが来てくれる時には、船に白い帆を、駄目なら黒い帆を上げてほしいと、秘かに依頼した。この話を立ち聞きした白い手のイゾルデは、自分を拒絶しているトリスタンへの怒りと復讐にもえる。船を待ちつづけるトリスタンに、白い手のイゾルデは、白い帆が近づいてくるのを見たにも拘らず、黒い帆が見えると告げた。この言葉はトリスタンに対する死の宣告であった。一方、やっとの思いで到着した王妃イゾルデも、トリスタンの死を知るや、その遺骸をしっかりと抱きかかえて、こと切れたのであった。ゴットフリートが既に語ったように、「この二人には一つの死と一つの生、一つの悲しみと一つの喜びが、共有のものとして与えられたのであった」。

トリスタンとイゾルデは、罪深き愛を宿命として甘受し、一つの死に至るまで、二人の愛と誠を貫き通した。そのことによって、彼らの罪深き愛は浄化され、地上の掟を超越して、ヨーロッパ文化の中で、愛の理想となりえたのであろう。ランケによって、「その愛の理想化は、トリスタン物語史の中で徐々に促進強化されたことが跡付けられたわけだが、ゴットフリートにおいて頂点に達したのである。現世の喜びを与える女神は、超現世的な、超現実的な、愛の理念、本当の意味での理想、人間では普通到達できないような、前人未到の憧憬目標になった」²⁸⁾ という解釈が与えられた所以であろう。

II

トリスタンは、父リヴァリーンと母ブランシェフルールの熱愛の結晶²⁹⁾ であり、母の命とひきかえに誕生した「悲しみ」³⁰⁾ の子であった。同じように、光源氏も、帝があまたいた女御、更衣の中から、ことのほか寵愛された桐壺更衣から生まれており、しかもその帝の寵愛をまわりから妬まれた桐壺更衣は、光源氏が三才の時に早世してしまっている。トリスタンは光源氏も、共に悲劇的な熱愛の結晶として、愛の宿命を背負うべく、誕生したことは興味深い。

また、トリスタンと光源氏は、古代物語の主人公にふさわしく、誰からも称えられるような美形の持ち主であり、学問に秀れ、音楽の才に恵まれた若者として、トリスタンは伯父マルケ王に、光源氏は父帝にことのほか寵愛されるという共通性をもっている。

一方、「光り輝くイゾルデ」³¹⁾ は、アイルランド国王の王女であり、「かがやく日の

宮」³²⁾ 藤壺は、先帝の第四皇女であって、共に比類ない美しさと、詩歌管弦の才にあふれる貴女であった。これらの主人公たちは、洋の東西を問わず、昔物語に共通の型を示しているといえよう。

このイゾルデとトリスタンが、藤壺と光源氏が、ともに罪深き愛に陥り、マルケ王を、そして帝を裏切るのである。

ただ、イゾルデとトリスタンの愛の在り方と、藤壺と光源氏のそれとは、異なったものであった。

光源氏は、幼い頃から五才年長の藤壺の中に、亡き母桐壺更衣の姿を求め慕うが、十二才で元服し、葵上と結婚させられた頃から、「さやうならん人をこそ見め」³³⁾（そのようなお方をこそ妻としたいものだ）という恋情に変わっていく。だが二人は、「御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて」³⁴⁾（管弦の催しのある折などに、藤壺の琴に笛を吹き合せてお聞かせしては心を通わせ、君はかすかに漏れてくる宮のお声を慰めとして）、気持ちをかよわせるしかなかった。

しかしながら、政略結婚であった葵上に対する態度は別にしても、光源氏は、やがて、空蝉という中流官吏の後妻と一夜を共にしたり、六条御息所という、今は亡き皇太子の妃であった人の所へ通いつめたり、その道中の荒家でみつけた夕顔と逢瀬を重ねたりする。その上、藤壺の兄の娘で、「限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれる」³⁵⁾（限りなく深い思いを捧げ申しあげるお方に、じつによくにている）若紫を見染め、何としても手元に引き取りたいと考える。こういう遍歴を藤壺思慕のなせるわざという解釈³⁶⁾も成り立ちうるだろう。

ところが、こういう女人遍歴の間に、光源氏は藤壺と許されぬ逢瀬を重ねた。藤壺が病と聞いて、「心もあくがれまどひて」³⁷⁾（心も上の空に迷い）、無理矢理光源氏は押しかけて行く。

「宮もあさまかりしを思し出づるだに、世ととも御もの思ひなるを、さてだにやみなむ、と深く思したるに、いとうくて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとうちとけず、心深く恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむ、と、つらうさへぞ思さるる。

何ごとをか聞こえつくしたまはむ。くらぶの山に宿も取らまほしげなれど、あやくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

（源氏） 見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがなとむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

（藤壺） 世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても
思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などは、かき集めもて来たる」³⁸⁾（宮も、思いもよらなかったかつてのできごとをお思い出しになるのさ

え、不断の御物思いの種であるのだから、せめてあのことだけで、もう終りにしようと、深くご決意を固めていらっしゃったのに、こうなってしまった事態がじつに情けなくて、堪えきれないご様子ではありながら、それでいて、情愛こもり可憐さをたたえ、といっぺなれなれしくはなく、思慮深くこちらが気づまりなほどの御物腰などは、やはり普通の人とは違っていらっしゃるのを、君はなぜこのように、ここは不足だというような点さえもおありにならなかったのだろうと、そんなことまでつい恨めしくお思いになられる。

君は、申しあげたい万々を、どうして申しあげずつくすことがおできになれよう。夜明けを知らない暗部の山に宿りもしたそうであるけれども、あいにくの短夜で、嘆かわしくも、なまじ逢わないほうがましなくらいである。

『こうしてお逢いできてもまたお目にかかれる夜はむずかしいのですから、いっその夢の中にこのまま私は消えてしまいとうございます』

と、涙にむせかえっていらっしゃるご様子も、さすがにひどくいじらしいので、

『世の語りぐさとして、後々まで言い伝えないでしょうか。この類なくつらい私の身を、覚めぬ夢の中のものとしましても』

思い乱れていらっしゃる宮のご様子も、まことにもっともであり、畏れ多いことである。命婦の君が、君の御直衣などは、とり集めて持ってきている。

以上がこの逢瀬の場面である。

この場面については、山口仲美氏によると、³⁹⁾ 藤壺は帝の後という身分でありながら、男の激情に負けて再び身を許した自分の運命を嘆いている、この密会を不可抗力の運命的なものと感じ、「憂き身」といった言葉を使って、もっぱら自分の不運を思い嘆く口惜しく情けない気持ちをあらわす、光源氏を嫌ってないことだけはわかるが、積極的にその激しい愛に応えるものは何もない、あるのは己の運命を深く見つめ嘆く言葉だけである、という解釈が示されている。

イゾルデがトリスタンとの宿命的な逢瀬に、積極的に陶醉した場面（引用14）と、この藤壺の逢瀬の場とを比較していただきたい。藤壺が自己の宿命をみつめ、嘆き悲しむ態度とは、天と地の差がある。この明と暗こそ、この二組みの罪深き宿命的な愛がたどる行く末を暗示している。

藤壺と光源氏は、相思相愛であったか、否かについては、国文学者の間にも見解の相違があるといわれている。⁴⁰⁾ 専門家の研究においてすら、見解を二分するほど藤壺像はベールにおおわれている。素人がという心苦しさを感じつつ、敢えて筆者は、上記の場面を再度の逢瀬として、「さてだにやみなむ、と深く思したるに、いとうくて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深く恥づかしげなる御もてなしなどの」と記した紫式部の藤壺描写を重視したい。后として、義母として、許されぬ逢瀬を重ねてしまいながら、「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず」というア

ソビバレンスこそ、藤壺の愛の姿であったといえるのではなからうか。

しかも、藤壺はこの逢瀬で光源氏の子を身籠ってしまう。この恐ろしい宿命を、その後、藤壺はたった一人で耐え抜かなければならなかった。

というのも、光源氏の方は、夕顔を思い出しては「いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ、見つけてしがなと、懲りずまに思しわたれば」⁴¹⁾（どうかして、仰々しい世間の評判もなく、ほんとにかわいらしげな人で、気がねのいらぬ女を見つけないものだと、性懲りもなく君は思いつづけていらっしやるので)、醜女とも知らず、末摘花と契りを結ぶのである。その一方で、若紫の可愛いさに虜となつては、「心から、などかかうき世を見あつかふらむ、かく心苦しきものをも見てゐたらで」⁴²⁾（自ら求めて、どうしてこんなままならぬ縁で苦勞するのだろう、こんなにいじらしいものを捨ておいて)とも、光源氏は考えたりしている。

これでは、出産をひかえて、里帰りしていた藤壺が、光源氏の見舞いを寄せつけず、「宮の御気色も、ありしよりは、いとどうきふしに思しおきて、心とけぬ御気色」⁴³⁾（藤壺の宮のご様子も、以前に比べていっそう源氏の君とのことを悲しい因果と思ひ定めあそばされて、うちとけぬお気持)であったのも当然である。

藤壺は、光源氏に生き写しの子を生んだ。藤壺の罪の意識はいかばかりであったろう。光源氏は「いとど思いあはせて」⁴⁴⁾（いよいよそれと思ひあたることがあって)、この皇子の顔を見たいと藤壺に願ひ出るが、拒絶される。藤壺の心の闇の深さを、光源氏は理解できなかったのだといえよう。

不義の子とは知らず、桐壺院はこの皇子が四才の時に他界する。その間に、光源氏は、老女房の源典侍と戯れ合ったり、須磨流浪の原因となる朧月夜の君と契りを結んだり、また紫上と新枕をかわしてもいた。こういう風聞を耳にしない藤壺ではなかったろう。帝の亡き今では、と、迫る光源氏を藤壺は厳しく拒んだ。

「逢ふことのかたきを今日にかぎらずはいまいく世をか嘆きつつ経ん 御ほだしにもこそ」⁴⁵⁾（お逢いすることの困難なお方への、せつない思いが、今日だけに限らず後々も続きますのならば、私はこれから幾かえりの世を生きて、この嘆きをくり返しながら過ごしていくことでしょうか 私のこの執着が、あなたの来世への障りにもなりましように)という光源氏の恨みごとに対して、藤壺は、「ながき世のうらみを人に残してもかつは心をあだと知らなむ」⁴⁶⁾（ながく幾世にもわたるお恨みを私の上にお残しになりましても、それは一つには、あなた自身のお心にまことがないからなのだと知っていたきたいのです)と答えている。

「かつは心をあだと知らなむ」という藤壺は、光源氏の誠の欠如をはっきりと非難している。藤壺は帝の後でありながら、人倫の掟をこえて、義理の息子に当たる光源氏の愛を受け入れてしまった。その上、不義の子を出産したという、女だけに負わされた宿命に恐

れおののいている。これは、光源氏の契った、他の女性の誰一人も背負っていない大きな罪であった。このような大きな罪を犯してまで、宿命的な愛に応えた藤壺が、じっと一人で苦悩していた間、光源氏は女人遍歴をくり返していた。光源氏には、藤壺が彼のために背負った罪の大きさ、その心の闇の深さを思いやることができない。なぜなら、光源氏がどれほど藤壺を熱愛していようとも、彼には、トリスタンがイゾルデに持ちつづけた誠が欠けていたのだから。

光源氏の熱愛は、藤壺にとって、まさに恨みの残る愛であった。だから、藤壺は帝の一周忌が済むと、一方的に出家する。出家することによって、罪を償い自分自身の宿命的な恋情を断ち切ろうとしたのであろう。それでも、藤壺は死後、光源氏の夢に立ち現れ、紫上に自分のことをもらしたと恨んで、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」⁴⁷⁾（漏らすまいとおっしゃいましたのに、浮名が世間に現れてしまいましたから恥づかしくて。苦しいめにあっているのにつけても、うらめしく思われまして）と嘆いている。これは、誠の欠如した光源氏の愛に対する、出家によっても浄化しえなかった恨みの言葉ではなかっただろうか、清水好子氏は、「作者は此の世の栄華も名誉も何ほどのことはない、好きな男と添いとげられぬことこそ千載の遺恨だというようである」⁴⁸⁾と解釈されてはいるが。

この恨み言が、「仏道に入ってまでも精算できなかった藤壺の源氏への愛の心」⁴⁹⁾と表裏一体のものであることは、確かである。しかし、この夢の後の光源氏の思い、「行ひをすたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、この一つ事にてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」⁵⁰⁾（勤行をなさって万事に罪障を軽められたようなご様子でありながら、あの一つのことで現世の濁りをすすげないでいらっしゃるのであろう）という思いは、藤壺の罪の意識とは、余りにも距っている。光源氏には、藤壺と同じ罪を分ち合っているという意識は、全く感じられないといってもよかろう。光源氏がそれを悟るときが来るのであろうか。罪の子、薫を抱いたときであらうか。藤壺の心の闇の深さを、誠の欠如の故に理解しえなかった光源氏には、藤壺と罪を分ち合える至福は、永遠に訪れないことだろう。

III

以上述べたように、イゾルデとトリスタン、藤壺と光源氏の、愛の在り方には、明と暗ともいうべき違いがある。その相違は、物語を生み出した土壌の差に帰因すると考えられる。

ゴットフリートによって、トリスタン伝説の愛の理想化が頂点に達した13世紀初めには、キリスト教精神に支えられた騎士階級は、宮廷文化の最盛期を迎えていた。ローマ法が支配してした4世紀初めまでは、ヨーロッパでも一夫多妻が認められていたが、キリスト教

の浸透と共に、その教義は、一夫一婦制を求めた。その上、マリア信仰は、女性崇拜への道を用意していた。十字軍による東方の高度な文化との接触や、経済の発達に伴う社会的余裕などが、新しいヨーロッパ宮廷文化を形成する要因となる。その結果、冒頭に引用したように、11世紀と12世紀の変わり目に恋愛の新しい概念が生まれ、野蛮な社会を、それまでにない洗練された文明社会へと変えていった。雅びの愛、高きミンネの中に、精神の高揚と浄化が求められるようになっていた。

古いトリスタン伝説の罪深き愛といえども、この時代には、理想化されうる機は熟していたのである。ここに、イゾルデとトリスタンの愛が、一つの死に至るまで、愛と誠を貫き通す徹底性によって、その罪を浄化し、至福の愛へと理想化され、「人間では普通到達できないような、前人未到の憧憬目標」となりうる土壌があったと考えられる、現実と理想との乖離が大きければ、大きいほど、愛の新しい理想像が求められたという社会があったにしても。

一方、「源氏物語」の書かれた11世紀初頭の平安王朝は、土田直鎮氏によると、⁵¹⁾ 女のもとに男が通ってくるこの時代には、女は経済的にも、婿の世話をする立場であって、婿の力だけを頼みにして生きるような生活のみじめとし、恥とするたてまえであったという。男が一夫多妻の形を取れば、女が一妻多夫の姿勢を示しても、決して罪を問われることはなかったといわれる。生まれた子供は、必ず母の手元で養育され、それが妻の一家の責任であり、権利であったという。このような夫婦生活は多分に恋愛的なもので、離合の容易なものであったと考えられている。

このように母系が強力であった貴族社会であったが故に、娘を後宮に入れ、娘の生んだ皇子の外戚となることが、天皇の後見役として、摂政関白の地位に直結する道であった。藤原道長が、わずか十二才の娘、彰子を、二十才の一条天皇の後宮に入内させたのも、この理由による。

道長は彰子入内にあたって、選り抜きの女房を四十人つけたという。その女房の一人が紫式部である。「父の道長は娘の女性開眼を必死になって企画したに違いない。したがって、その教育は人間としての全般的な教養というよりは、いちじるしく帝に愛されるためのもの、男を目当てとしたものであったと思われる。源氏物語に現われる女性が、すべて男の眼を通して見られている体になっているのはおそらくこのような理由が根本にあるからだろう」⁵²⁾ という清水好子氏の指摘のように、「源氏物語」は、中宮彰子が一条天皇に愛されるための愛の教科書でもあったのだろう。そうであれば、藤壺に対する光源氏の熱愛から、誠が欠如しているのも、当然なのかもしれない。

さらに、和辻哲郎氏の見解によれば、⁵³⁾ 平安時代の「男は女よりもはるかに内的である、しかもそこには万葉人に見るとき新鮮な、率直な緊張はなく、弛んだ倦怠の情に心を蝕まれている」という。男たちの生活内容は、「官能的な恋かしからずば権勢である。しか

も彼らは恋においても権勢においても、その精神的向上に意を用いることがない」と指摘されている。

このような平安の男の世界は、12世紀のヨーロッパの雅びの恋、高きミンネの中に、精神の高揚と浄化を求めた世界とは、まさに正反対である。このような平安朝の男からは、誠を求めることは不可能である。

「しかるに女は、恋を生命としつつ、しかも意志弱き男の移り気に絶えず心を掻き乱される。彼らが恋において体験するところは、はるかに切実であり、はるかに深い。……明らかに女らは、精神的に云って男よりも上に出ている。しかし女らには、このより高い立場から男を批評する眼は開けなかった」という指摘は和辻氏の烟眼ではあるが、果して、「男を批評する眼は開けなかった」のであろうか。紫式部が、藤壺と光源氏の罪深き愛を、「この世の濁り」をすすげぬものとして、敢えて書き残したのは、誠の欠如した男に対する批評であったのではなからうか。

註

- 1) ジャンヌ・ブーラン／イザベル・フッサール（小佐井伸二訳）『愛と歌の中世』白水社 1989. p.94 「波の上の船のように」
- 2) 同上 p.8
- 3) 『相愛女子大学・女子短期大学研究論集』第22巻 拙稿参照
- 4) フランス語：イズー (Yseut)、ドイツ語：イゾルデ (Isolde)、英語：イズールト (Iseult)
- 5) リチャード・バーバー（高宮利行訳）『アーサー王 その歴史と伝説』東京書籍 1991. p.114
- 6) 『相愛大学研究論集』第5巻 拙稿参照
- 7) Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu hrsg., ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. Stuttgart 1981. をテキストとして行数を示し、訳文は『トリスタンとイゾルデ』石川敬三訳 郁文堂 1987. より引用する。8253-8260……8290-8293
- 8) 9983-10003
- 9) 10058
- 10) 10257-10266
- 11) 11439-11444
- 12) 11741-11744
- 13) 11789
- 14) 12157-12182
- 15) Reiner Dietz: Der 'Tristan' Gottfrieds von Straßburg. Probleme der Forschung (1902-1970). Göppingen 1974. S. 89ff
- 16) 『相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集』第25巻 拙稿参照
- 17) 12436-12438

- 18) 12447-12452
- 19) 15707-15716
- 20) Rüdiger Krohn: *ibid.* Bd.3. S.146
- 21) 井上泰男・木津隆司・常見信代『中世ヨーロッパ女性誌』平凡社 1990. p.14
- 22) 16700
- 23) 16815-16820
- 24) Friedrich Ranke: *Die Allegorie der Minnegrotte in Gottfrieds Tristan.* In: *Schriften der Königsberger Gelehrten Gesellschaft, Geisteswissenschaftliche Klasse, 2. Jahrg., H. 2, Berlin 1925.* — *Wiederabgedr. in (und zit. nach): A. Wolf (Hersg.): Gottfried von Straßburg. Darmstadt 1973. S.4*
- 25) R. Diez: *ibid.* S.198
- 26) 18294-18314…18352-18358
- 27) 18709
- 28) Fridrich Ranke: *Tristan und Isold.* München 1925. (Bücher des Mittelalters 3.) S.209
- 29) 『相愛女子大学・女子短期大学研究論集』第25巻 拙稿参照
- 30) 1999
- 31) 8256
- 32) 『源氏物語』 日本古典文学全集 小学館 より引用 第1巻 p.120
- 33) 同書 p.125
- 34) 同書 p.125
- 35) 同書 p.281
- 36) 清水好子『源氏の女君』塙新書 p.30～
秋山虔『源氏物語への招待』(別冊国文学 No.1. 昭和53年12月) p.6
- 37) 同上『源氏物語』第1巻 p.305
- 38) 同書 p.305,306
- 39) 山口仲美『恋のかけひき』主婦と生活社 1991. p.50～
- 40) 鬼束隆昭『藤壺の宮』(源氏物語講座 第2巻) 勉誠社 平成3年 p.39
- 41) 同上『源氏物語』p.339
- 42) 同書 p.379
- 43) 同書 p.391
- 44) 同書 p.397
- 45) 同上『源氏物語』第2巻 p.104
- 46) 同書 p.104
- 47) 同書 p.485
- 48) 清水好子 同上 p.48
- 49) 山口仲美 同上 p.66
- 50) 同上『源氏物語』第2巻 p.486
- 51) 土田直鎮『日本の歴史』5. 王朝の貴族 中央文庫 p.93～
- 52) 清水好子 同上 p.74
- 53) 和辻哲郎『「もののあはれ」について』和辻哲郎全集 第4巻 岩波書店 p.154